

印度遊記抄

前田聽瑞

一車窓感興

昭和三年九月十五日。

此處、三界は火宅の國、梅檀香の薰發する國、濕婆(Siva)神のダンスする國。

「雨は何時もあはれなる中に、秋はまして身にしむこ多かり。」昨夜、カルカッタへの旅枕、孤枕轉々人伴はず、雨聲を聽きつゝ車窓に睡つたが、今朝午前三時すぎ、ふと眼を醒せば、月天心、銀河聲なく、山河影あり。

ヤージニヤツルクラ
祭皮衣仙よ。夕陽既に沒したる時、何ものかこれ人の光なる。

仙曰、唯月のみ人の光として存在す。

故に月のみをその光に仰ぎて、人は坐し、動き、業を作し、而して家に歸る。

ウパニヤット
こは奥義書の聖句である。車窓獨り明月に對して古文を靜思す。風流ミ云はんか乎、無風流ミ云はん乎、風流無き所亦風流ミ云はん乎。されど、印度長途の行脚、耳に慣れて未だ目に見ぬカルカッタの都、またいつかはこ心細し。前途三千里、愁思胸に塞がりて「憂に泣けるその折は、月よわが身をてらさざれ」の感を深くした。

二カルカッタの宿

九月十六日。夜が明ける。椰子やマンゴー(Mango)や種々の綠樹が蒼々ミ鮮茂してゐる。綺麗な鳥が池邊に群り飛

んでゐる。田園に繪の如く散在する椰子葉の屋根。綠蔭で竹細工に餘念なき土人たち。觀賞適悅應接に遑あらず。

午前八時頃、カルタツタに着いた。廣い驛の構内で、私はふと故郷の訛を聞いた。私はその瞬間、豫期しなかつた、全く不思議な何とも言はれぬ嬉し、懐しの情緒で胸が一杯になつた。長途遍歴の旅の空、こゝカルカッタで故郷訛を聞いて急に日本式の宿、たゞひそれがこんなにさゝやかなものであつても日本人經營のホテルが實に懐しきもの、慕はしきものゝして私の身心を占奪した。乃ち私は不躰にその未知の日本人に聲をかけたが、天與か偶然かその人は此地在住のカルカッタ通であつた。早速タクシーを命じて格好の日本人經營のホテルを案内して呉れたことは、予に取りて如何ばかりか嬉しかつた。

宿に着すれば、殆んど總ての人を擧げての歡迎で、今更ら慚惶の至りであつた。宿はカルカッタの中心街から程遠からぬ所謂日本人街、山田屋ホテル。部屋は純日本式の八疊、床には無名氏の筆、前赤壁賦の「白露橫江、水光接天」の軸がかゝりてゐた。宿は土人街に臨み、坐して往來の光景に面接する。如何にも一興だ。先づ一浴して塵埃を落し、浴衣がけにて午餐の箸をこつた。食膳には吸物あり、刺身あり、澤庵あり、日本酒あり。遊程幾十日、久振に生命の洗濯をした。一浴、一食、一睡、皆適意ならざるはなかつた。

三 カルカッタ小言

天の橋立に「股のぞき」といふのがある。普通に眺めるのとは違つた景趣があるといふので、彼の地では一つの名物になつてゐる。しかし、此處カルカッタでは私はほんの通りがゝりの客人、真正正銘のエトランゼ、今は股のぞきの遊興は愚か、一人歩きすら出來かねるといふ孤特、遊子である。かうしたカルカッタ見物、股のぞき以上の一風變つた趣向が現はれるかも知れぬ。紀行價值の如きは固より小碎、たゞ迂生一個の忘れな草に過ぎない。

カルカッタは印度の最大都市で、恒河の三角洲上、その分流フーグリー (Hooghly) 河の左岸、ベルガル灣頭より八十マイル遡行せる所にある。

ガンヂス、ブラフマプトラ (Brahmaputra) 兩河の流域、ヒンダスタン大平原の自然的門戸に當り、鐵道・運河も集り四通八達、文化的施設もよく整ひてゐる。その總べてと言はざるまでも、大半は歐州的な都市の色調を帶びてゐる。殊に樞區マイダン (Maidan) の夜明けは私にはあの清潔なベルリン市の朝ほらけを思ひ出させる。ローマは一日にして成らず。カルカッタの今日は英人の勇猛精進にして志願倦むこなき力闘百五十年の賜に相違ないが、印度を想ひ、印度文化に慄がれる私の心の片隅に、かうした「英國のカルカッタ」に對する反逆的な氣持が巢喰ふこも亦已むを得ない。さうした意味で、白色の大建築、恐ろしく高い塔、塔上の勝利の女神、金力に輝く廣場、常緑の芝生、アスファルトの大道路等々の眼もあやなる華やかさ、麗はしさには缺けてゐるにしても、印度的な見地からすれば、カルカッタを南北に二分するボーバザー・ストリート (Bow bazar Street) 以北に展開する純インド人街に寧ろ強烈な感興を催し來る。街路は狹隘、その上人通りが繁く、その臭汗塵穢正に人を臭殺せんとする。その中を神牛なるものが悠々散歩してゐる。ヒンヅー教徒間では牛は濕婆 (Siva) 神の化身。神牛の通るころ、人も車も皆停止する。敬禮する。加之、その牛糞を汚穢物視せず、手で握り家の壁にべたべた塗つてゐる。手の届く便利な處は一杯の牛糞だ。寔に以て印度教教的な街趣、予には宛かも生きた印度教史の一節を読むの感がある。

「この世には美しいが故に愛する場所と、愛するが故に美しい場所とがある。」かりそめの旅で仰いだライン川畔のローレライの月の光、繪のやうな瑞西はベルン (Bern) やチューリヒ (Zurich) の都市風景は前者の例に屬するであらうし、こゝ學窓二十年常に印度に關心を持つ私にとつては、それがこんなに愚淺な野態であり、醜穢な風物であつても何か犇々胸に迫る「歌の心」を感じる純印度人街の如きは後者の適例である云ひ得るであらう。無論私一個の醉興で

あるかも知れぬ。

印度は一ではない、多である。それは雜厠間錯せる多の集積である。印度人といふ概念は歐洲人云ふ以上に、その中に雜多の人種を包んでゐる。此處、カルカッタ市には一瞥數種の人種が雜居せるかの如くであるが、仔細に檢索するに幾百の異人種が一呼一吸右往左來、皮々相反し、顔々相向ひ、黃白相對し、心々相爭ひ、實々相抗し、轉た相入間して、その奇觀正に稱說すべからざるものがある。印度の雜多は人種民族のそれに止まらぬ。そは實に同時に宗教の雜多であり、更に言語・階級の雜多を以てしてゐる。斯くして印度の雜多は轉倍して止まる所を知らぬ。寔に印度は人種、宗教、言語、階級の相違に依つて、分裂對立割據せる諸種の社會の混淆である。若し都市に個性といふものがあるをすれば、此處カルカッタは經濟の都市云ふよりは、寧ろ「雜多の都市」、「人種展の都市」でも云つた方が適切であらう。それはこも角、こゝカルカッタの史蹟として有名なものはブラック・ホール (Black Hole) 事件である。一七五六年、ベンガル地方の土侯スラジャー・ドウラー (Surajah Dowlah) 兵を擧げて英人の根據地たるウキリアム城塞を襲撃し、百四十六人の男女を俘虜せしめ、これを狹小の獄舎に投じ、六月二十日夏の眞つ盛りに室を密閉して炎熱のために斃死せしめたといふ事件である。その記念碑はダルハウジー (Dalhousie) 街區の北隅、郵便本局の側に立つてゐる。知らず、この碑は英人のためか、印度人への皮肉か。遙よ出てて遙よ奇。何れにもせよ、この碑は歴史に乏しいこの都市隨一の史蹟である。

四 カリーリ 祠堂 濕婆神・カリーリ女神を語る

九月十八日。カリーリ祠堂の見學は豫てからの志願であり、今、カルカッタの滞在も亦この素志を果さんがためであ

る。

此見學は宿の主人吉田啓次郎君が東道であつた。乗合自動車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は逐次改まる。車床閑々、車行悠々、見學には寧ろ無上の仕合であつた。車行約半時にしてカーリー祠堂前に着く。門前には乞食が三々五々待ち受けてゐるし、御供物の強賣を示す小店が軒を並べて參詣人に呼びかけてゐる。勸めらるゝまゝに御供物數種を購つて、カーリー祠堂に詣でた。

境内は諸樹蔭鬱、河を擁して、自から一郭を成してゐる。祠堂は三百有餘年前の建造物、廣殿大社云はんよりも幽堂矮社云ふ趣がある。社殿の界限は參詣人で賑ひてゐた。異教徒は無論、尋常一般の贅者も内殿に入るこゝが許されてゐない。唯社殿の闕に進みて供物を獻じ、神徳を歌歎し、祈願を籠めるに過ぎぬ。予も亦服を整へて稽首し敬禮した。更に渚崖に出づれば梅檀樹ありて、華葉垂れ布いて、香氣普く薫じてゐる。渚崖は沐浴のための石階區域で數十の行者衆は河に臨んで或は坐し、或は立ち、或は階を尋ねて河に入つて沐浴するのがある。その游浴の相、何れも風土の香が溢れてゐる。

蓋し沐浴は印度教徒が罪垢を蕩除する善巧方便、その眞摯な態度は、實に我等の如き異教徒をして、愛慕、隨喜を禁する能はざらしむ。さはれ心を淨むることを知らず、たゞ沐浴を以て罪垢を消除し得るこゝを盲信せる心事を思ふこゝき、この行法に對し、無量の感慨が湧き來る。予は佇立、茫然數時、幾度か覺えず暗涙を催した。

印度ではかゝる沐浴場、殊に河岸に築かれた石階區域をガート(Ghat)に云ふ。カーリー祠堂は印度教の大神濕婆(Siva)の妻カーリー(Kali)を奉安せるこゝで、ガートは寧ろこの祠堂に隸屬するもの、それで通常兩者を合せてカーリー・ガート(Kalighat)に總稱してゐる。カルカッタなる都市の名も亦このカーリー・ガートから由來するこゝいふ。尙ほ近代まではカルカッタ近畿はカーリー・クセトラ(Kali Ksetra)即ちカーリーの土地として知られてゐた。思ふに、カルカ

ツタ市の存在する限りは、こゝ南郊のカーリー・ガートはこの都市と^{まじ}與に存し、カーリー女神も亦長く都市の象徴となるであらう。

こゝガート一帯の景物に接すれば見るものも聞くものも面白い。かゝる景觀に身を托すれば、心中何の煩累もない。幽鳥の崖樹に啼き渡るを聴きつゝ、私は何時しか濕婆神を思ひ、カーリー女神を考へてゐた。

濕婆^{シヴァ}の神は印度教の三大神の一。逐一想味すれば繁に堪へないから、こゝでは簡潔を尊ぶことにする。

上古、梨俱吠陀に嵐神ルドラ (Rudra) があつた。この神は破壊的な恐るべき荒神であるが同時に又慈祥、恩惠的な方面をも具有してゐた。

それで常に濕婆 (Śiva—吉祥・恩惠) なる尊號に於て拜跪された。後、次第に獨立して一神となり、當初は主として粗暴な民衆の信仰を勝ち得たが、漸次勢力を得て、完全なる人格を備ふる大神となり、遂にブラフマン (Brahman—梵天) やシヌメ (Viṣṇu) など同等、又は以上となり、紀元前夙に名聲十方に響流し、神徳魏々殊妙、一般民衆の信仰對象となり、爾來印度教の主要神として、ヤシヌメ神と共に印度教徒の上に君臨した。但し、濕婆神の性能は多角多彩であるが、要約すれば左の六種を擧げることが出来る。

第一には、この神は破壊的勢力の權化で、有情は固より神をも殺害する。故に破壊者 (Hara) 又は大時 (Mahātāla—大時天) と稱せられ、常に髑髏を其頸に纏ひてゐる。又彼は其眼より威光を放つて一切を燒盡し、その灰を以て己が身軀を塗飾したと傳へられてゐる。第二に破壊の後には再造再生が来るべきである關係上、一轉してこの破壊神濕婆をば再生的勢力として表現する。この再生の徳はやがてリンガ (Linga—男性生殖器) を以て表徴せられ、この神は現今印度の到る處、この形に於て崇拜されてゐる。第三に、濕婆は偉大な苦行者・禁慾者として描かれてゐる。即ち榕樹の下に

坐して、三昧常寂、神智洞達せる大梵志 (Mahayogi) として之を表示し、其身體は裸形にして結髪し、細灰を以てその身に塗りてゐる。第四に、かく禁慾・冥想の濕婆は一轉して哲人・學者となり、やがて一切聖智の源泉として婆羅門の依處、婆羅門の神となりてゐる。従つて濕婆の崇拜が婆羅門の間に盛んであるのも、もよりのこゝで、その宗教が内秘敎の性質を帯びる所以も亦こゝにある。第五に、濕婆は一面に於ては放恣蕩逸の神となつて、常に酒に耽り美を嗜んで舞踏嬉樂してゐる。この方面は女神崇拜派の濕婆で濕婆崇拜派の本領ではない。第六に、濕婆も亦幽鬼の王 (Devavara) となる。髑髏を以て瓔珞とし、以て之を胸に懸け、一蛇頸を繞り、幽鬼・夜叉を従へて墓場に徘徊出沒するものとされてゐる。

斯く濕婆の性能は多岐多彩である關係上、その信仰も亦多方面に亘りてゐる。それは、こも角『律法經』なきに於ては濕婆は大神 (Mahadeva) 自在天 (Isvara) 獸主 (Pasupati) 等と稱せられて、ギシユヌよりも一般的に優勢であつたことを考へらるゝ。

更に濕婆神の形相に就て考へを續ける。

濕婆の相好は一面若くは五面 (五面神の場合はバンチャーナナ Panchanana と呼ぶ) 常に過現末の三世を徹見する三眼を有する。その中央なるは前額に位し、その上に新月を戴き、以て月の推移を表はす。其頸を纏へる蛇は歲月の交替順行、髑髏の瓔珞は生類の生・住・滅を表示せるもの。身は灰を以て塗飾し、頭髮は束ねて髻をなす。頭上、恒河を支持し、その奔流髮飾の如く滔々下界に流下して復歸らず。面貌は白色なるも死神・幽鬼の王としては黒く、頸領は一切を殺すべき毒素ありて青色を帯びてゐる。虎・象・鹿の皮を布き、常に聖牛ナンデー (Nandi) に跨り若くは之を伴ひてゐる。持物としては三叉戟 (Trishula) を執りて惡魔を降伏するの理趣を示し、繩 (Pasa) を以て敵を縛するの力用を表し、太鼓 (Damru) を携へて敵を擊破するの性能を顯示してゐる。

濕婆神を思尋するものは必ずまた舞踊王としての濕婆ナタラージャ(Nataraja)を想起する。この神の舞踏は創造と維持と破壊とを意味してゐる。舞踏王としての像に於ては、濕婆は四手を有し、その髮髻は舞踏のために轉旋してゐる。頂上には眼鏡蛇(Cobra)の體、恒河の人魚像及び新月を戴き、左右の耳環は男女を以てし、一手は太鼓を把り、一手は火を執り、一手は上に向け、一手は舉げた足を指してゐる。右足は侏儒を抑壓し、旋火輪は蓮臺より出で、舉身を彌覆し、太鼓を把れる手は火を執れる手は之を支持してゐる。舞踏の理趣は大概左の如くである。梵天(Brahma)の夜は天地靜寂で、濕婆も意に隨つて舞踏する事が出来ぬ。時に濕婆は起つて躍り乍ら太鼓を亂打し、以て醒悟を促がす、天地自然も亦躍動し來つて、一の火輪となつて濕婆の周圍に踊り廻る。かく濕婆は時到的も尙舞踏を演じて、遂にその火焰を以て宇宙一切を滅盡し、事畢れば乃ち休息するといふのである。微時と恒時、暫有と悠久とは邊際なき空間と無窮の時間に亘つて行はるゝ交替盈虚の相用に依つて調和される。

洵に日月の運行、原子の永劫的運動、創造と破壊、これ等は常に吾人の心頭に往來する概念である。然も之を舞踏王のダンスに於て表象した印度人の功用業績は實に超勝獨妙であるを稱してよい。これは決して予が所好に阿る譯ではない。

閑話休題、印度教の一特色はその總べて云はざるも、概して男性は靜物高雅で、逆に女神は動的にして活潑・強健・殺伐・鬪亂であることである。血に渴けるゾルガー(Druid)又はカーリーの如きはその代表的のものである。これ等の女神は濕婆神の妃と云はんよりも、その一屬性たる破壊力を高調せる趣がある。

世に闇黒・恐怖・臭腥を表象せる像も多かるべきも恐らくカーリー女神の形象の如きはその隨一であらう。カーリーは黒面鬼相の女神。眼は血走り、髪を亂だし、口を開き、齒を露はして嗤笑し、喉は血に濕ひ、頸には人首よりなる璽珞を懸け、一手は劍を携へ、一手は人首をひつ提げ、以て夫神濕婆の胸上に亂舞してゐる。それで此女神を祀るには常

に血を以てする。甚しきは人をも犠牲に供へるこゝがある。羚羊・犀の肉はカーリー五百年の満足を買ひ、人の血は千年の満足を買ふに足るこゝいふ。其形相の怪奇にして血を見ずんば已まざる狂暴性は蓋しこの女神の特色である。

祠堂の前には犠牲の血で赤く塗つた石疊がある。あの石疊の上で百千萬の羊や、山羊の首が落されたのかと思つて見る。カーリー女神の信者達がその犠牲の血を各々指端に染めて頂戴歡喜したのかと思つてみる。祠堂の内殿奥深く鎮座せるこの吸血神の嬌笑縦舌は更に人を慘ましき人身御供の遠い幽かな昔に誘ふのである。

愛を割いて祠堂を辭して陋巷に出づれば葬列が安詳として往く。屍は擔架に載つてゐる。胴體は僅かに白布を以て之を覆ひ、顔面・手足は露出し、底極下賤、人理殆んぞ盡きんとするものがある。悲哀胸に滿ち、暗涙潛して下る。途中には貧窮乞人が三々五々食を乞ふてゐる。羸陋醜惡、正視するに堪えざるものがあつた。踵を回して、土産物店を訪ひ、記念にカーリー女神の畫像を購つた。他に購ひたいものは皆無であつた。

【半日の見學、存分に飽足し得たのは全く吉田君の同伴・清遊の賜であつた。

宿に歸れば、煩熱正に人を蒸殺せんす。午餐後、脚を伸ばして甘睡した。

中宵、月に誘れて場末の街を遊歩した。浴衣がけに團扇の日本人が五三床坐に倚りて涼を取りてゐる。往還の同胞は多く立ち寄つて涼み合ふ。予も亦「しばしここで立ちこまりつれ」を、野人禮を慎まず、坐牀笑談意の適する所にかす。諸君諸姉高談轉た清し。月光晝の如く、轉た涼々。夜ふくるほごに再會を約して宿に歸つた。二千里外故人の心遠く思ひやられて旅愁いさゝ押へ難し。旅愁は是れ道場なり。歸命合掌、佛恩・師恩を仰ぎ、忍辱・精進を念じつゝ、華胥の國に遊ぶ。

五 見 學 大學・博物館

あくる一日、晴光暉々、四恩の感激に浸りつゝ、午前はカルカッタ大學その他、午後は博物館 (Indian museum) の見學に没念した。

印度にも古くから大學的な教育は嚴密して存した。婆羅門教に於ける咀叉始羅 (Takṣaśīla = Taxila) 大學 (Paṇḍit's)、佛教に於ける那爛陀 (Nālandā) 大學、回教に於けるデリーの大學 (Madrasah) の如きはその顯著なるものの隨一であらう。けれどもこれ等は今日の所謂大學とは似而非なるもので、寧ろ歐洲に於ける中世基督教の教育に近接せるものがあるを謂へよう。古代婆羅門の教育は、今日我等の眼から見れば、あらゆる美點を具備してゐることは云はぬが、少くとも其の德育の方面に於ては尤も適切な教育的活動を演じたものと稱してよい。婆羅門教の教師 (Guru) は何等世に求むる所なく、懇親篤切、學生を提撕し、行住座臥、常に導師となつて心に厭足なきものゝ如くであつた。人格の養成は、人格者にして、初めて之を能くする所、洵に德育は心から心への感通、謂ゆる以心傳心の感化でなくてはならぬ。我等はこの意味に於て婆羅門教の教師に學ぶべき多くの理由を認める。

こゝカルカッタ大學は純然たる近代的な大學である。當大學は一八五七年カンニング (Canning) 卿志願の下にマドラス (Madras)、孟買 (Bombay) の二大學と共に併設されたものである。當時は何事も試験を重ずる時代であつた關係上これ等最初の大學は當時のロンドン大學の軌範に則り純然たる試験場であつた。其後時の推移につれ、大學は試験と共に教授もしなければならぬこの點も認められた。斯くして新大學はアラハバット (Allahabad) 及びラホール (Lahore) の地に開かれ、次いでバトナ (Patna) ランゲーン (Rangoon) 等の諸地に陸續として大學創設の運びに進んだ。然し、その規模の宏大、施設の完備は固より、所謂大學の仕事といふ點に於ても、當カルカッタ大學は確かに全印度各大學に一

頭地を抜いてゐるに稱してよい。殊に當大學の文科、就中東洋學科の一班を記するも亦興趣なしとせざるも、斯くの如きは唯同好の士と偕に語るべきもの、今は之を割愛しておく。

こゝで話題を轉ずる。印度博物館はマイダンを前景とし、チョウリンギー (Chaulingi) 街に聳立し、實に五天の神品雄作を鐘めたる無價の寶藏である。殊に印度美術の研究者趣味者は痛著顧戀、低徊去る能はざるものがある。

その建築外觀の美、蒐集物の豊富さ、その陳列の巧妙さ、これを社會公衆の知識の啓發に利用しようとする方法考案に至つては、かの大英博物館に比すべくもないが、印度美術そのものを鑑賞する點に於ては別に些の不足はない。

この博物館は是れ道場である。研究・冥想・鑑賞の道場である。ランブルワ (Rampur) 出土の阿育王石柱頭冠 (牛獅子) バルハット (Bharhut) —— アラハバード (Allahabad) の西南百二十哩の地に位する —— の塔門の石欄、健陀羅 (Gandhara) の佛教美術、摩菟羅 (Mathura) 及びアマラバティ (Amaravati) の遺品、婆羅門教・耆那教美術等、不朽の大作逸品が歩を轉ずるに共に現前する。かゝる大藝術品を見るため、味ふためには實に多年の研究と修養を要する。一の美術品を鑑賞することは單に作品を鑑賞する事でなく、其の作品を作つた作家の精神を洞見し味識する事であるからである。印度の造像家はその造らうとする神に祈願を籠め乍ら、極めて嚴肅な態度で作に臨んだ。

造像家が大作に向ふ前夜は「神々の主よ、わが造らんとする形像を如何に完成すべきかを夢に於て告げさせ給へ」に至心に祈念を捧げる。アグニ・プラーナ (Agni putāna) は傳へてゐる。印度の宗教美術は總べて所謂「一刀三禮の藝術である。佛像・菩薩像・諸天鬼神像等、更にその相好、印相、持物等々を熟視し、思念するにき、その眞純、眞摯、敬虔その咄々「聖」に迫る形像は諸の塵垢を遠離し、信心を増發せしめられる。印度の造像家は志勇精進の極、諸根明利、情滿ち感酣なるの好潮を俟ちて、合掌叉手、徐ろにその力作に遊入せるもの。苟くも作らず、然も作れば必ず全力を傾到する。一相の白毫、寶冠、瓔珞乃至蓮座等皆ならざるはない。しかも彼等はその名を記さず、その名を賣らず。洵

に彼等の一生は本然の美的生活に始終し安立して、不増であり、不減である。偲ぶ可きは彼等の製作よりも寧ろ彼等の人格であらねばならぬ。此處に印度藝術の光がある。生命がある。

古川に水多し。流石に印度であり、殊に博物館の設置に大關心を持つ英國であり、蒐集品の豊富には、とても鑑賞に違がなかつた。充分の鑑賞には餘生を此處に送るを要する。かくて私は結局博物館不見にて還つた。所謂空手來、空手去は此事であらう。さるにても思ふ。凡そロンドンに滞在し、または見物に出かけた日本人で、大英博物館やビクトリヤ・アルバート博物館を見なかつたものは無論一人もあるまい。そこに陳陳されてある日本の美術工藝品の夥多なるに驚倒、慙慨した吾々日本人である。日進の文化を追ふに急であつたわが日本が、この方面に着眼せなかつたことは遺憾な極みである。これが設備は、もこより多大の經費を要するとは云へ、材料そのものは富豪・同好者の手にあるのであるから、その方法さへ宜しきを得れば、割合に造作もないはずである。予はその筋の要人並に識者が今後に於て熟慮斷行の結果を、我等に嘉惠せんことを翹首して待つてゐる。

晩は宿の主人と偕に淺酌談笑、興酣なる頃、偶々わが同胞五三來訪、席を同じくす。皆酒を嗜むといふよりも、鯨飲深更に至る。予は心中ひそかに啄木が歌へる「田も畑も賣りて酒のみほろびゆく、ふるさこ人に心寄する日」を想起した。予としては同胞の諸君に銘謝すべき理由が多くある。仍て中座の無禮を陳べ、旅思を忘れて安眠した。

六 榕 樹 の 蔭 植 物 園

九月二十日。晴、夙起、土人街に出づれば、曉風吹くところ冷氣を覺え、誦經の聲するところ、初めて一祠堂あるを知る。祠堂に性標（*Yingga*）を祭りてゐる。濕婆神は常にリンガの形に於て崇拜せられる。この性標崇拜は生殖器崇拜で

印度に於ける大小リンガ神像の數は無慮三億を算するに稱せられてゐる。祠堂の界限は櫛比する土人の陋屋、土人乞食で嘈雜してゐる。

朝歿の後、宿の主人の需に應じて「崇徳興仁」の四字を大書した。異域の宿に予の惡筆を残す、慚惶の極みであつた。

筆を投するに、間もなく宿の主人に誘はれ、植物園の見物に出掛けた。

園はフーグリーの西岸に位し、大樹蒼々、規模宏敞、世界有數な植物園に比して些の遜色もない。創基は一九八七年、陸軍大佐ロバート・キード (Robert Kyd) の發意に係り、後、經營・守成宜しきを得て今日に至つた云ふ。園の廣長實に二七〇エーカー、自動車路は縱横に貫通し、隨所に池あり、青亭あり、開花あり、幽草あり、芝生ありて、洵に都會人の悠適所であり、樂土である。

園内の王者は何と云つても榕樹 (Banyan) の老樹である。巨樹鬱乎として一大森林をなし、遠望すれば茂れる丘の如くである。この榕樹は枝より根を垂れて幹となり、その枝より根を下し、斯くの如く轉倍して、今や直徑三〇〇メートルの地面を覆ひ、高さ二六・五メートルを超過するに稱せられてゐる。この巨樹を現前に仰いだ時は、思はず驚歎の聲を發した。その壯大・偉觀洵に想像以上である。椰子の囁きを聞きながら、四時綠な榕樹の蔭に、毗紐敎の神を偲んでゐるのがヒンヅ種族ではないか。少くも世界に特色ある宗教を生み出した古のヒンヅは正しくさうであつた。彼等の生活はさながらの宗教である。

この榕樹の前に立つて、吾々は彼等の生活を想ひ、同時に樹木崇拜の「聖」なる世界に誘はれる。樹木崇拜は天然崇拜の一種で、個々の樹木・森林を其儘神したり、或はそれに神靈宿るを見て崇拜することである。印度ではこの種の樹木崇拜は甚だ盛んである。

梵天の住處に信ぜられる菩提樹（この樹は又梵天・毘紐致（Vishnu）濕婆の三神が住むとも考へられてゐる、）特に毘紐致信者に尊崇されるツラシー（Tulasi）樹、蛇除けの神として崇仰されるニームバ（Nimba）樹、濕婆神として崇信されるビルバ（Vilva）樹等の如きはヒンヅーの人々から特に神聖視されるものである。榕樹も亦ヒンヅーの神木として昭著なるものである。この樹は實に毘紐致の神として崇敬されてゐる。植樹の際は神像を淨むると同じ作法を以て之を行ひ、次で「毘紐致の神よ、願くはこの樹の地上に榮ゆるが如く、われにも亦等しく天上の壽命長久を與へ給へ」を祈願を捧げる。この樹を植ゆれば、その積徳の致すところ、壽終れば福應じて天上に生ずることが出来るに信じてゐる。印度は實に到るに宗教がある。

園内の小亭、清流繞ぐる處に於て午餐す。四圍は塵外の境、ドリアン（Durian）マンゴウ（Mango）マンゴスチン（Mangosteen）パパヤ（Papaya）等の熱帶植物は莊々として繁茂し、その榮色光耀たる景觀はこても視たものでなければ與に語る能はざるものがある。

午餐後、またしても園内を此處彼處に逍遙した。水蓮が今を盛りと咲いてゐる。其他我等の名を知らざる芳草野花が爛斑としてゐる。快適幽賞、歡を盡して市街に向つた。

天地有情の夕まぐれ、東道の諸君と別れて古本屋に赴いた。書冊充滿、何か意外の堀出物がなきか丁寧に吟味した。しかし、その過半は概ね予が英・佛・獨の古本屋に於て購ひしもの、期待した收獲もなく、無用の時間を浪費したことは云へ、予に於ては他人の遊覧見物の興味以上のものがあつた。何もカルカッタ滞在の記念と思つて、百費を節縮してプラーナ（Purana）文學に關するもの拾餘冊その他を購求した。歸來、これ等の書冊に對すれば、宛も契濶の親友に出會ひたる心地、頗る欣快の情に禁へざるものがあつた。

七 漂泊の思やます

九月二十三日。うつし世の旅宿の朝、茶を喫しながら、教會の鐘の音を聴く。清揚哀亮、鐘聲を聴くこ心がおのづこ静かになる。ふと、その昔愛誦した土井晩翠翁の「その塵深き人の世の、夕暮ごに聲揚けて、無限永劫神の世を、警め告ぐる鐘のおも、源流既に遠くして、濁波を揚ぐる末の世に、無言の教宣りつゝも、有情の涙さそへるか」の名詩を不覺口吟み、坐るに第三高等學校時代の當時を想ひ出した。

けふ一日は予にこりては休養の日。明日は愈々ビルマはランゲン (Rangoon) への旅、漂泊の心持ちが依然こして胸の中に巢喰つてゐる。「日々旅にして旅を棲處こす。古人も多く旅に死せるあり」こいひ、「片雲の風に誘はれて漂泊の思やます」こいつた俳聖芭蕉の心なき思ひ浮び、ビルマの空、ランゲンの假の宿またいつかはこ心細し。然し又「行けば見もする逢ひもする」さすがに打捨てがたき旅寢の幸福さを思願して、この恵まれた業運の前にほゝ笑みもした。一人ゐる心よき静けさは、つい左の古詩を思ひ起した。

四十餘年睡夢の中、而今醒眼始めて朦朧、

知らず日已に停午を過るを、起ちて高樓に向つて曉鐘を撞く。

こは哲人王陽明の述懐、誦し來つて、遊學二年壯志未だ成らざる自己の現實を想到し、慨然之を久うす。

午後、ジョン・マレー (John Murray) の旅行案内記を読み、旅支度を整へる。その他には何も誌す事のないひこり旅のわびしさ。

八 さらに印度よ

九月二十四日。

私は愛著尙やまずして今印度を去らうとしてゐる。雨に煙るカルカッタの都、この雨聲裡にカルカッタ埠頭を離れ、暫しビルマへの旅、愈々歸朝の途に就くことになるに、印度に對する深い願戀が胸裡を循る。埠頭には私を見送り、一路平安を祈つてくれる宿の主人吉田君夫妻があつた。

午後三時に解纜したエクマ (Ekuma) 丸は數時間海上を走つたが、雨又雨、雲又雲、白日の航海、夜中一般、船窓の外、只だ茫々、漠々のみ。私はたゞ獨り船室に端座して、眼には見えないが、懐しい印度の山川、カルカッタのゆかりの宿に左様ならを捧けた。(終)